三重県埋蔵文化財調査報告１４８

水衛遺跡発掘調査報告

― 阿山郡伊賀町川東字水衛所在 ―

１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

ＳＤ３・導水施設検出状況（東から）

ＳＺ２・木樋出土状況（南から）

序

伊賀地方の河川は、木津川、淀川と名を変えながら大阪湾へと注いでいます。この河川の流れが示すように伊賀は、古来より現代に至るまで近畿地方との結びつきが強い地域であります。四方を山に囲まれた盆地ですが、県下最大級の御墓山古墳をはじめとして美旗古墳群など大規模な古墳が集中しており、早くから開けていた地域であったようです。

さて、今回報告します水衛遺跡は、阿山郡伊賀町川東字水衛に所在します。今回の調査は、県立伊賀高等学校体育館用地造成工事に先立って実施したものです。調査の結果、古墳時代ごろの木製品を利用した導水施設がみつかりました。このような施設を確認したのは、県内では初めてのことです。

今回調査した場所は、残念ながら造成工事のために消滅します。教育施設の建設は大変重要な事業ですが、その施設の下には我々の祖先が残した足跡があり、その足跡が今日や未来への発展の足がかりとなっていることを忘れてはならないと思います。その意味からもこのような成果を基に、地元の方々、そして県民の方々にも文化財保護への関心がより強く根づくのであれば、これに勝る喜びはありません。

発掘調査へのご協力とご理解を頂いた地元の方々、三重県立伊賀高等学校、伊賀町教育委員会、三重県教育委員会事務局総務課の方々に、厚くお礼申し上げます。

当報告書が伊賀地方の歴史を解明する上での糸口になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥村敏夫

例　　言

1　本書は、伊賀高等学校体育館建築用地造成工事に伴い緊急発掘調査を実施した水衛遺跡（旧称伊賀高校遺跡）の発掘調査報告書である。

2　水衛遺跡（旧称伊賀高校遺跡）は、阿山郡伊賀町川東字水衛に所在する。なお、遺跡名は「伊賀高校遺跡」とされていたが、遺跡範囲が学校敷地外にも及ぶと推定されるため、遺跡所在地の小字名から「水衛遺跡」に遺跡名を変更することとした。

3　調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課　　主　事　　船　越　重　伸

4　調査にあたっては、地元の方々、県立伊賀高等学校、伊賀町教育委員会、（財）三重県農業開発公社および三重県教育委員会事務局総務課からの協力を得た。

5　出土した木製品については、小林謙一氏（奈良国立文化財研究所）、光谷拓実氏（同）、臼杵勲氏（同）、加藤真二氏（同）、西山和宏氏（同）からご教示を得た。

6　木製品の年輪年代測定を光谷拓実氏にお願いした。記して謝意を表します。

7　当報告書の作成は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および管理指導課が行った。執筆、全体の編集は船越が、写真撮影は船越・木野本和之・田中久生が行った。

8　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断りのない限り縮尺不同である。

9　挿図の方位は、真北を用いた。なお、磁針方位は西偏6°30′（平成元年、国土地理院）である。

10　本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。
ＳＤ＝溝　　ＳＫ＝土坑　　ＳＺ＝不明遺構

11　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る契機と経過 …… 1
　1．調査に至る契機と経過 …… 1
　2．調査日誌（抄） …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．遺構 …… 6
Ⅳ．遺物 …… 10
Ⅴ．結語 …… 15

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　調査区平面図 …… 7
第５図　ＳＤ３導水施設位置図
　　および出土状況図 …… 8
第６図　SZ2 木製品出土状況図 …… 9
第７図　SD3 木製品出土状況図 …… 9
第８図　木製品実測図（1） …… 11
第９図　木製品実測図（2） …… 12
第10図　木製品実測図（3） …… 13
第11図　出土遺物実測図 …… 14

写真図版目次

図版１　調査前風景（北から） …… 19
図版２　調査前風景（南から） …… 19
図版３　調査区北側全景（南から） …… 20
図版４　ＳＺ２（南から） …… 20
図版５　ＳＺ２・木樋出土状況（東から） …… 21
図版６　調査区南側全景（西から） …… 21
図版７　ＳＤ３（西から） …… 22
図版８　ＳＫ５（東から） …… 22
図版９　櫛出土状況 …… 23
図版10　作業風景（西から） …… 23
図版11　SD3・導水施設出土状況（東から） …… 24
図版12　SD3・導水施設出土状況（東から） …… 24
図版13　出土遺物 …… 25
図版14　導水施設出土木製品 …… 26
図版15　導水施設出土木製品 …… 27
図版16　出土木製品 …… 28

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 17
第２表　出土木製品観察表 …… 17

Ⅰ．調査に至る契機と経過

1　調査に至る契機と経過

三重県教育委員会では、国および県が行う各種公共事業に対して、関係諸機関に事業照会を行うとともに事業予定地内の文化財の確認、保護に努めている。

平成７年度に三重県教育委員会事務局総務課から三重県立伊賀高等学校体育館用地造成工事実施の回答を受けた。工事予定地は休耕田であるが、水衛遺跡（旧称伊賀高校遺跡）の隣接地であることから平成７年６月28日に試掘調査を実施した。

工事予定地内に７カ所の試掘坑を設定した。その結果、溝およびピットを検出するとともに、古墳時代から室町時代に至る各種の土器が出土した。特に試掘坑No.1で検出した古墳時代の溝からは一木梯子（木製品）が出土している。このことから、工事予定地は水衛遺跡の範囲内に含まれ、古墳時代から中世にかけての集落跡であると考えられた。

さらに、工事計画では休耕田南側の丘陵斜面を削り、これによって出た土を造成用の盛土に利用することとしている。しかし、予定部分の丘陵上には中世城館（水衛１号宅跡～３号宅跡）があるとされている。現地を確認したところ、この斜面上に平坦地が認められることから、中世城館の可能性が想定された。

この取扱いについて県教育委員会事務局総務課、県立伊賀高等学校と県教育委員会事務局文化芸術課、県埋蔵文化財センター間で協議が重ねられたが、現状保存が困難なため、工事実施にあたり、用地造成部分については本調査を、丘陵斜面のカット部分については確認調査（トレンチ調査）を実施するとともに記録保存することとなった。調査必要面積は、合計約 3,200㎡である。休耕田部分については、湧水が著しく、一部分調査を断念したために最終調査面積は、 2,200㎡となった。

なお、湧水が多く、粘土や砂といった作業しにくい条件の中で、本格的な冬の到来までに無事に調査が終了できたのは、作業に従事して頂いた地元の方々の努力の賜物である。ここに御名前を記して、感謝の意を表したい。

岡森　角胤	岡森　辰義	界外　憲和
界外　　寛	鏑木　展江	木田　平造
草山　正夫	清水　淳子	南出　三男
高井　　保	谷口　　計	谷口　　薫
中森　和子	中森　一之	中森　貴彦
野崎　重成	樋渡　嗣男	福西　　正
丸山　　操	三根　信郎	宮西　　整
宮原　良子	宮原　芳人	山下　千代
山下　利雅	山下　典子	山中ふさ子

（敬称略・五十音順）

2　調査日誌（抄）

７月29日　重機搬入。表土除去（北側部分）開始。調査区西端部（学校側）で湧水多し。

８月５日　表土除去（北側部分）終了。最高気温35℃を記録。

８月６日　道具小屋、発電機、ベルトコンベアなどを搬入。

８月７日　地区設定。

８月12日　作業員投入。排水溝を掘削中に有蓋高杯の杯部がほぼ完形で出土。

８月14日　台風12号が日本列島を縦断。伊賀地域は影響なし。

８月23日　円盤状に加工した木製品が出土。

８月26日　試掘坑No1の南側を掘削中、木樋が出土。試掘調査時に顔を出していた木製品と判明。

ＳＺ２の肩の確認のためトレンチ２本をいれるが判然とせず。

８月27日　雨天のため、作業中止。夕方までの雨量

は22㎜を観測。

8月28日　ＳＺ2の東側の肩と思われるラインを検出。

8月29日　雨天のため、作業中止。

9月２日　ＳＺ２の掘削を開始。ホゾ穴と思われるものがある板が出土。

9月５日　再度、ＳＺ２の肩の確認のためトレンチの延長と追加をする。以降、掘削と水抜きの繰り返しの日々が続く。

9月20日　北側部分の調査終了。台風17号の上陸を想定して、対策を講じる。

9月22日　台風17号が接近するも影響無し。

9月24日　木製品の出土状況図作成。南側部分への進入路の付け替え作業を始める。

9月25日　平板測量。進入路の付け替え終わる。仮排水路の掘削を始める。午後より雨。

9月26日　雨天のため、中止。

9月27日　平板測量。仮排水路の掘削。重機が故障する。

9月30日　台風21号が奄美地方を北上。

10月１日　公社安全パトロール。平板測量。

10月２日　仮排水路の掘削。埋め戻し開始。

10月３日　表土除去（南側部分）開始。この日から約２週間、秋の長雨に祟られ、作業が思うように進まない。

10月９日　調査区中央付近で比較的大きな木製品が顔を出す。

10月14日　大雨のため、調査区内に多量の水が溜まる。ポンプ４台を稼働させるが、なかなか減らず。終夜稼働で、排水する。

10月17日　表土除去終了

10月18日　地区設定

10月21日　作業員再投入。南側の丘陵斜面にトレンチを入れる。

10月25日　Ｍ10区で横櫛が出土。

10月28日　ＳＤ３（Ｌ８～Ｌ９区）から板材が３枚連なって出土。「大型木樋か」と色めき立つ。

10月30日　ＳＤ３を掘削。板材を組み合わせた導水施設らしい。

10月31日　ＳＤ３（Ｌ6区）から刀形木製品と梯子が出土。

11月５日　梯子につらなって板材が出土。導水施設のつづきか？

11月８日　ＳＤ３（Ｌ５区）から木製品が出土。

11月11日　最低気温が０度。初氷、初霜を観測。

11月13日　季節はずれの台風24号が接近。本州の南海上を通過。影響無し。

11月15日　多量の湧水のために検出面が緩み、検出作業が出来ないため調査区南側の一部分の調査を断念。

11月25日　公社安全パトロール。

11月26日　掘削作業終了。写真撮影。

11月27日　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部から４名が来訪。

11月28日　平板測量。

12月１日　初雪を観測。

12月２日　雪のため、作業を断念。積雪３㎝を記録。

12月３日　平板測量。最低気温－２度を記録。

12月４日　平板測量。出土状況図作成。

12月６日　平板測量。木製品の取り上げ。

12月９日　導水施設に用いられていた杭を取り上げる。

12月10日　埋め戻し開始。

12月13日　埋め戻し完了。

12月19日　撤収完了。

12月20日　引き渡し。

12月27日　調査終了。

Ⅱ．位置と環境

水衛遺跡（1）は、柘植川左岸、標高約172mの河岸段丘上に立地し、行政上は阿山郡伊賀町川東字水衛に所在する。

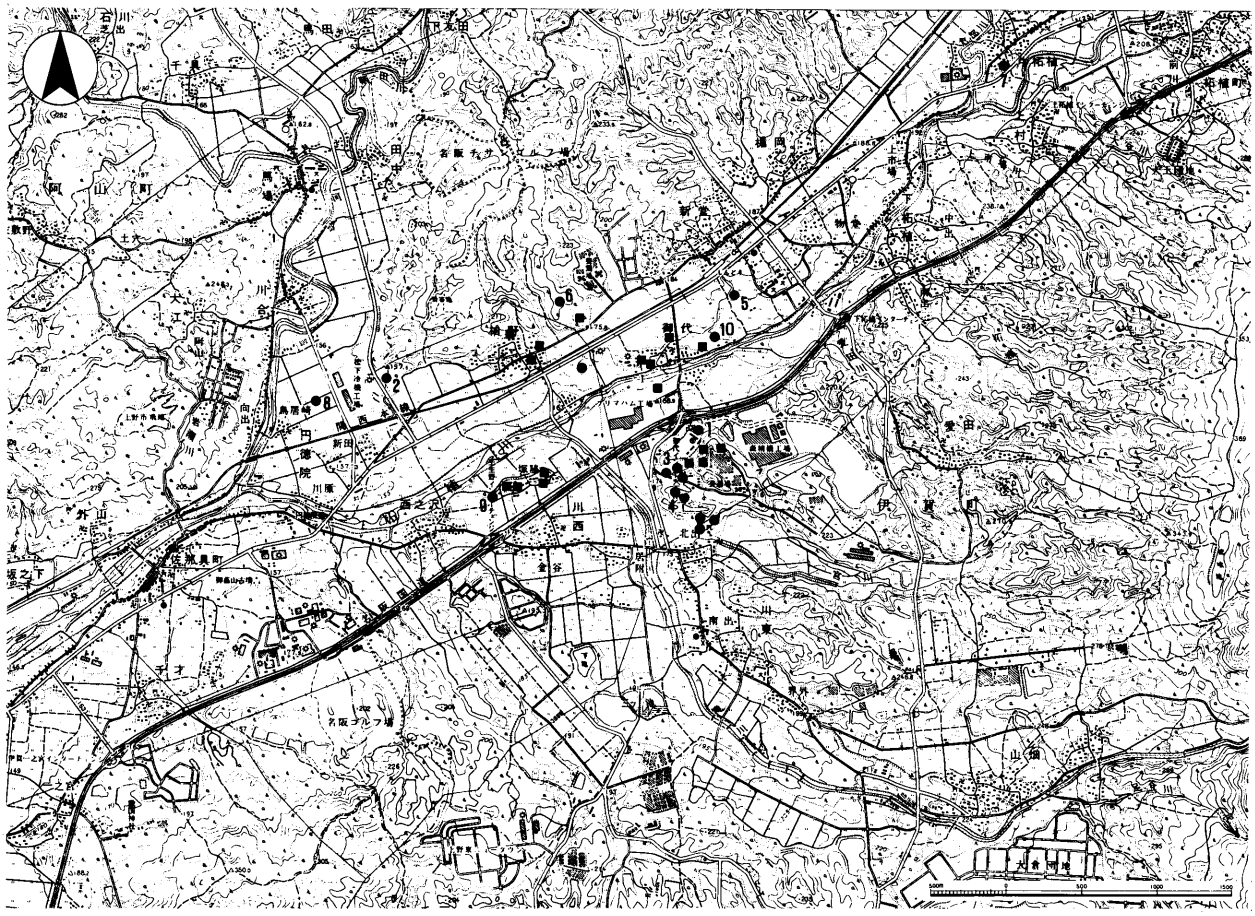
伊賀町内では、古墳時代以前の遺跡は、明確には確認されていない。しかし、小波田遺跡[1]で縄文時代のサヌカイト製有舌尖頭器が、川西地区で磨製石斧が表採されている[2]ほか、天道遺跡[3]で縄文土器片が出土している。

古墳時代になると、柘植川沿岸の地域には、多くの遺跡や古墳が出現する。古墳について見ると、当遺跡の北西約1kmには、4世紀前半に築かれ割竹形木棺を直葬した主体部を持ち、県下最古の古墳とされる東山古墳[4]（2）をはじめ、天長山古墳群（3）・内田古墳群（4）・新堂古墳（5）・権現山古（6）・筒御前古墳（7）など、多くの古墳が築造されている。

天長山古墳群1号墳は、昭和4年に旧彦根高等商業学校教授・橋本犀之助によって発掘されている。多量の朱にまみれた環頭大刀とともに5世紀末の須恵器・勾玉などが出土しており、内部主体は木炭槨であったとされている[5]。昭和45年には、県立伊賀高校の生徒が6世紀頃の須恵器の壷と器台の破片を採集している。器台は、四段透かしで最上段のみ長方形孔、その他は三角形孔となっている。この遺物は復元され、県立伊賀高校に保管されている。

また、権現山古墳は昭和38年に工事中発見された古墳で、6世紀前半の須恵器が出土しているが消滅している[6]。新堂古墳では円筒埴輪片が採集されている。筒御前古墳は、6世紀後半の須恵器、土師器、鉄製品、玉類などが出土し、内部主体は横穴式石室であった。

伊賀町内に点在する古墳は小規模であるが、これ

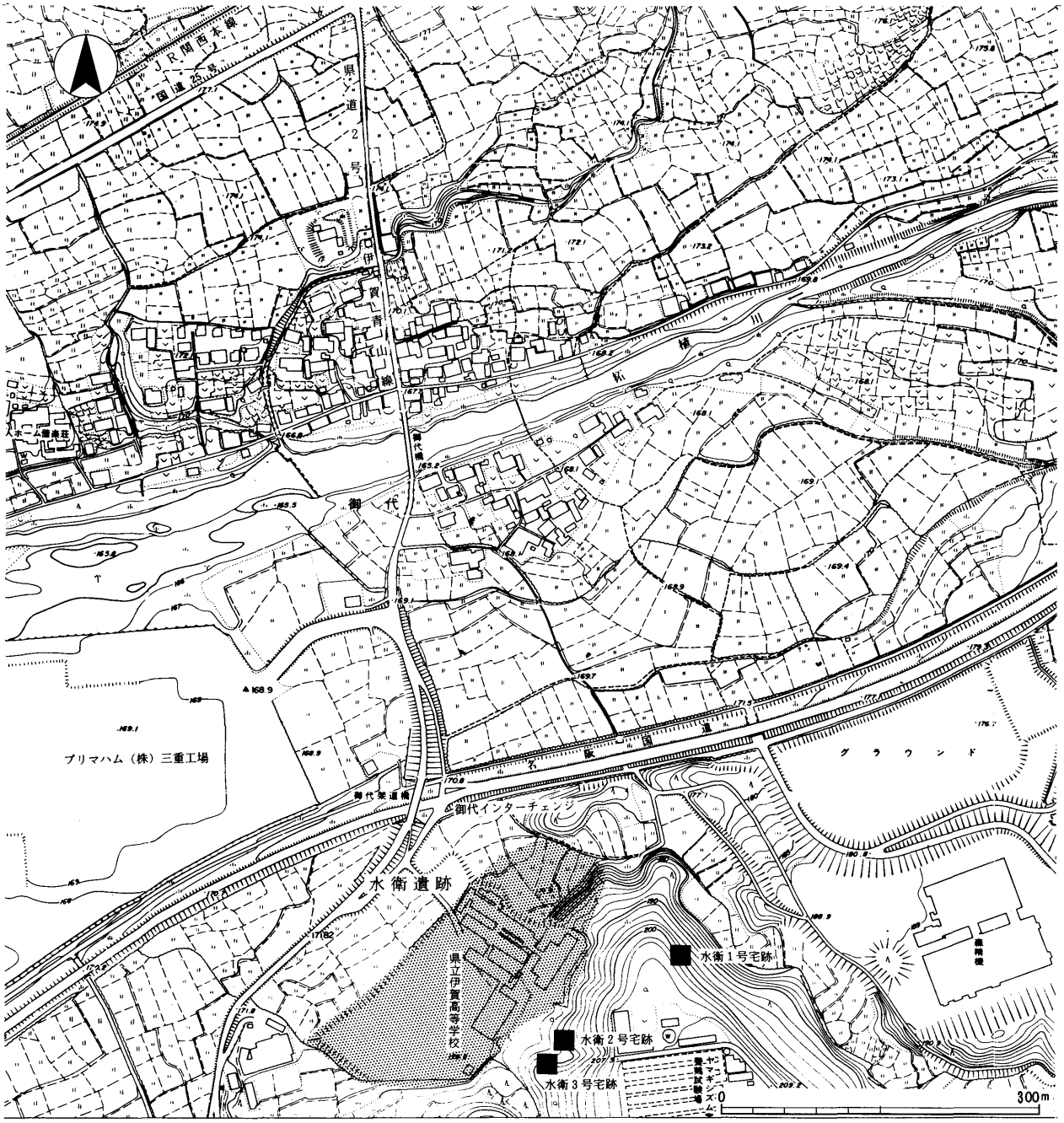


第1図　遺跡位置図（1：50,000）国土地理院『上野』（1：25,000）より●印は古墳・集落、■印は城館

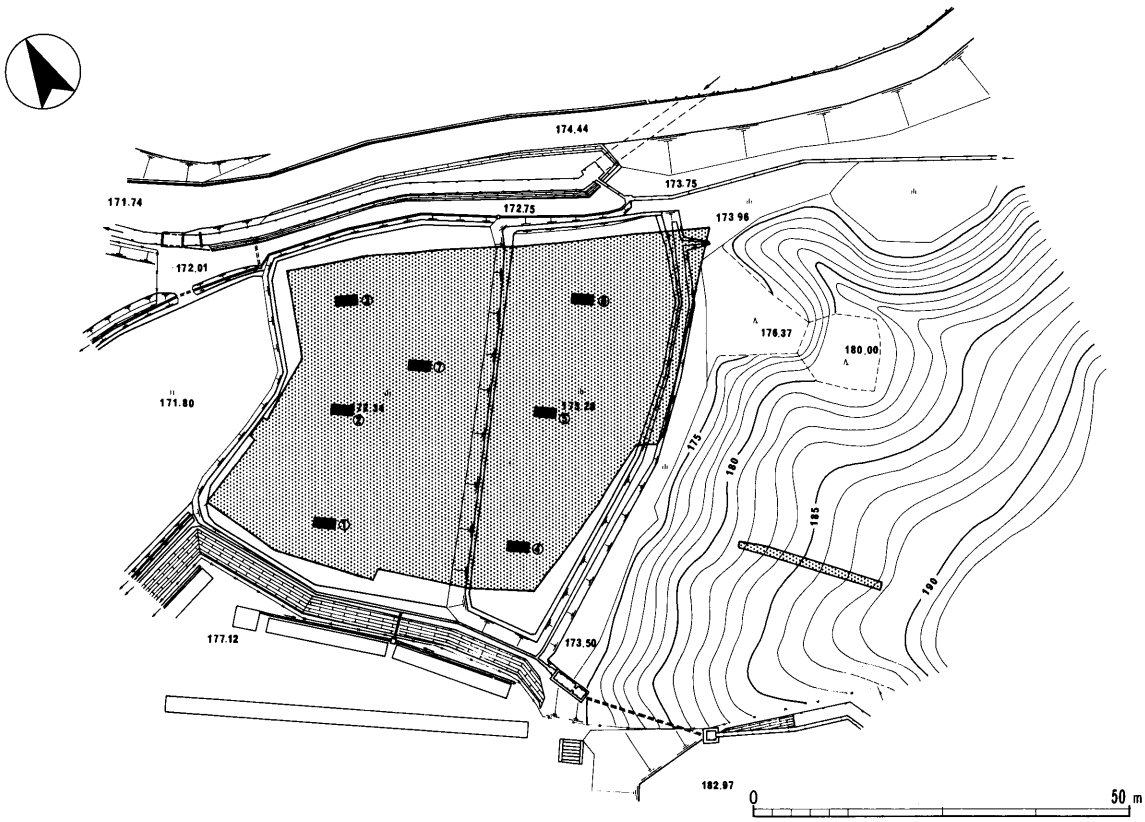
ら古墳の分布から、古墳時代におけるこの地域の開発が柘植川上流へと進められていったことが窺える。

また、集落跡としては古墳時代初頭の竪穴住居11棟と建物を区画する大溝が検出された北中溝遺跡[7]（8）や古墳時代後期の竪穴住居８棟が検出された天道遺跡[8]（９）、竪穴住居19棟が検出された畔垣内遺跡[9]（10）がある。北中溝遺跡で検出された竪穴住居のうち２棟には屋内にベット状の高まりが認められた[10]。また、畔垣内遺跡で検出された竪穴住居のうち１棟は焼失住居であり、比較的器高が低い器種を中心に原位置またはそれに近い状況で遺物が出土している[11]。ともに興味深い資料である。

柘植川沿岸地域が古くから開発されていたことは、この地域に最近まで遺されていた条里遺構からもわかる。この地域は旧伊賀国阿拝郡壬生野村に属し、小字名に条里制の名残りやさらに古い時代の水田地割りも認められる。福永正三氏による条里地割の復元によれば[12]、水衛遺跡は九条三里三十一坪から三



第２図　遺跡地形図（１：6,000）



第３図　調査区位置（１：1,000）■は、試掘坑　丸数字は、試掘坑番号

十二坪付近にあたる。

伊賀町が歴史の表舞台に登場するのは、７世紀後半のことで、大海人皇子と大友皇子の皇位継承争い、いわゆる「壬申の乱」の時である。『日本書紀』は、大海人皇子が吉野から美濃への進軍の際に現在の名張市から上野市、伊賀町を通り、鈴鹿へと伊賀国を縦断するような形で通過していると記している。[13]

平安時代以降、伊賀国では東大寺をはじめとする畿内の大寺院の荘園が数多く経営されている。この地域でも玉滝荘・予野荘（東大寺領）、柘殖荘（大安寺領）、柏野荘（東大寺領・長溝堂領）、壬生野荘（春日若宮領）、河合荘（萬寿院領）などが知られている。的場遺跡は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての遺跡であるが、四面廂の掘立柱建物や倉庫をもつ建物群を検出しており、柏野荘域に含まれると考えられることから、その関係が注目される。

中世の伊賀国では、荘園体制の崩壊とともに数多くの小領主が台頭し、その拠点としての城館が多数築かれていく。当遺跡南側の丘陵にも、水衛１号宅跡、同２号宅跡、同３号宅跡の３遺跡が所在しているが、詳しいことはわかっていない。このような城館は、伊賀国全体では500カ所以上が確認されているが、その分布には偏りが見られる。柘植川流域は多くの城館が築かれた地域の１つである。当遺跡の所在する川東地区は、伊賀町内でも特に集中する地域の１つである。これらの城館は、集落内や集落の後背丘陵に位置し、一辺数十ｍの土塁で囲まれた単郭もしくは複郭程度の単純な郭構造をもつものが多い。これらは、戦国時代以降の構築と考えられるが、恒岡氏城のように天正伊賀の乱に際して構築されたものもある。また、柏野城や壬生野城のように天正伊賀の乱の伊賀勢の拠点となった城もある。

Ⅲ. 遺　構

1 層　序

調査区の現況は、丘陵端部付近に位置する休耕田である。この場所は、複数あった田圃を２筆にまとめる工事が過去に行われている。

調査の工程上、北側地区と南側地区に分けて調査を実施した。両地区の田面高の差は、約１ｍである。

基本的な層位は、耕作土、暗褐色粘質土（包含層）、淡褐色土、淡青灰色砂質土もしくは黄灰色砂質土（地山）の順で、地山は南東方向から北西方向へと傾斜している。また、透水層が比較的浅いところにあるため、湧水が著しい。

2 遺　構

A　本調査部分

北側地区では、溝１条と小穴を、南側地区では、土坑１基、溝２条、導水施設と小穴を検出した。また、両地区にまたがる形で池状遺構を検出している。

ＳＤ１　調査区の北西部分を斜めに横断する幅0.7ｍの浅い溝である。調査区中央付近から南方向については検出できなかった。

ＳＺ２　不定形の池状遺構である。西側部分は、学校管理棟の下へと続いていく。埋土は、暗灰色粘質土、灰色砂質土、腐植層、砂利の順であった。木樋、一木梯子、板材、須恵器・古式土師器などが暗灰色粘質土から出土している。

ＳＤ３　東西方向に弧状に調査区を横断する幅２～４ｍ、深さ 0.2～ 0.3ｍの溝である。東から西に向かって緩やかに傾斜している。調査区西端では、ＳＺ２に近接しており、学校管理棟の下付近で合流している可能性がある。中央付近では、転用した木製品を用いた導水施設を検出している。また、この施設に連なる杭列も検出している。この杭列は、東側部分ではＳＤ３からはそれて、さらに東へと続く。

ＳＤ４　東西方向に調査区を横切る幅２～４ｍ、深さ 0.2～ 0.3ｍの溝である。東側部分では、二方向に別れ、一方は幅を狭めながらもさらに東へ延びるが、もう一方は、途中で収束している。西側部分は、ＳＺ２に合流している。また、この溝を斜めに横切る形で杭列を検出している。比較的新しい時代のものと思われる。

ＳＫ５　調査区南端付近で検出した不定形な土坑である。深さは0.25ｍと比較的浅い。大型楕円形曲物の底板が出土している。

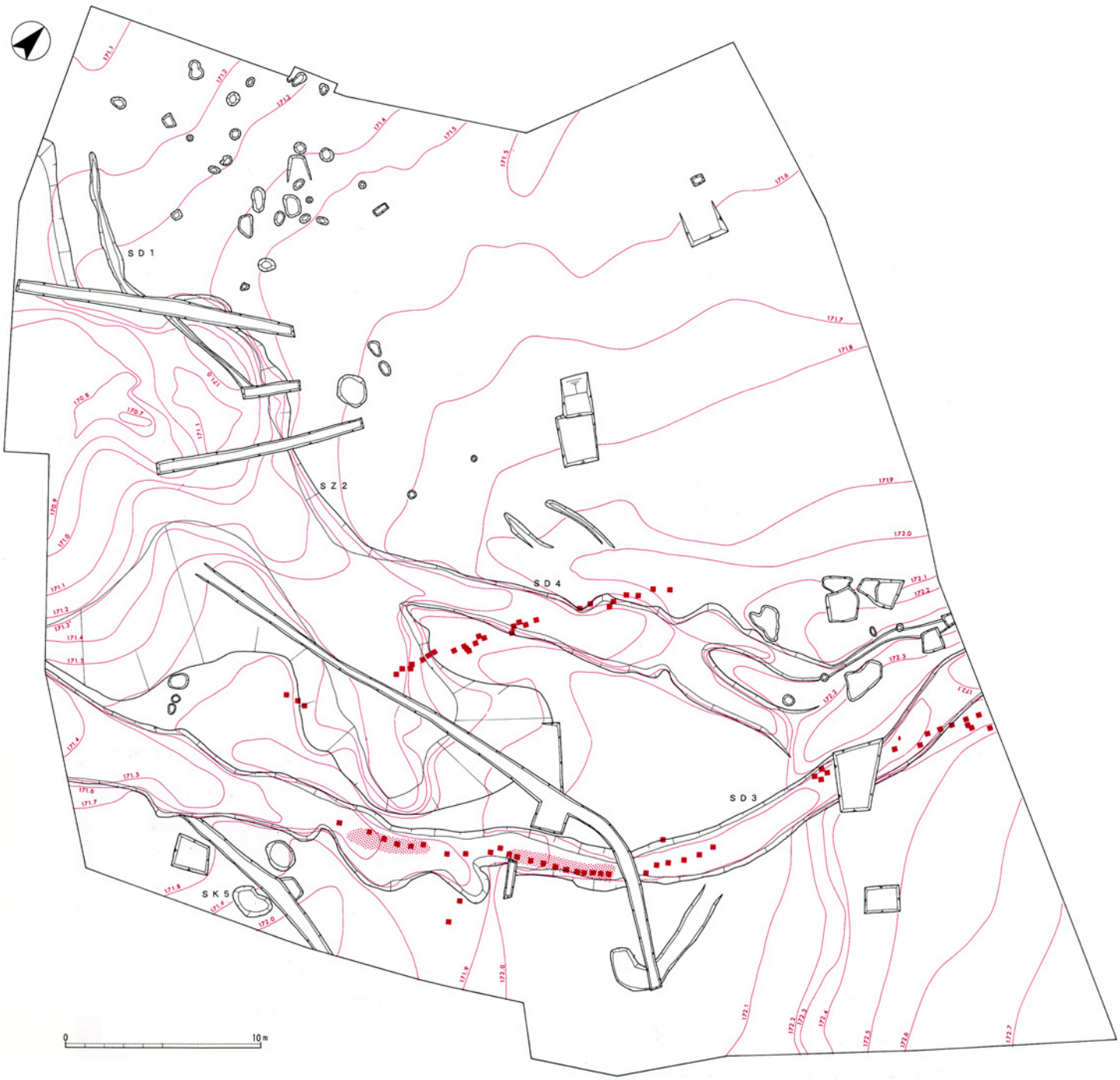
導水施設　ＳＤ３の中央付近で検出した。板材、一木梯子などを組み合わせてつくられた暗渠状の施設である。２カ所に分かれて検出しているが、相互を結ぶような形で杭列が認められることから、この２つは一連の施設と考えられる。東側は３連、西側は２連で、各々の端部は重なり合う部分が認められる。この施設は、天板と側板、側板を支持する杭で構成されている。杭は、 0.2～ 1.2ｍの間隔で打ち込まれている。側板と杭の上面はほぼ同レベルで、天板の丘陵側は杭の上面で支持されていた。北側の側板と杭、底板は検出されなかった。底板に相当する部分は、ＳＤ３の底と共有する形となっている。

全体的には、杭列の並び方から非常に緩やかな円弧を描いた形で敷設されている。杭列が東側でＳＤ３から外れていく部分では地山上面に設置され、それ以外の部分では埋設状態、もしくは半埋設状態であったと考えられる。

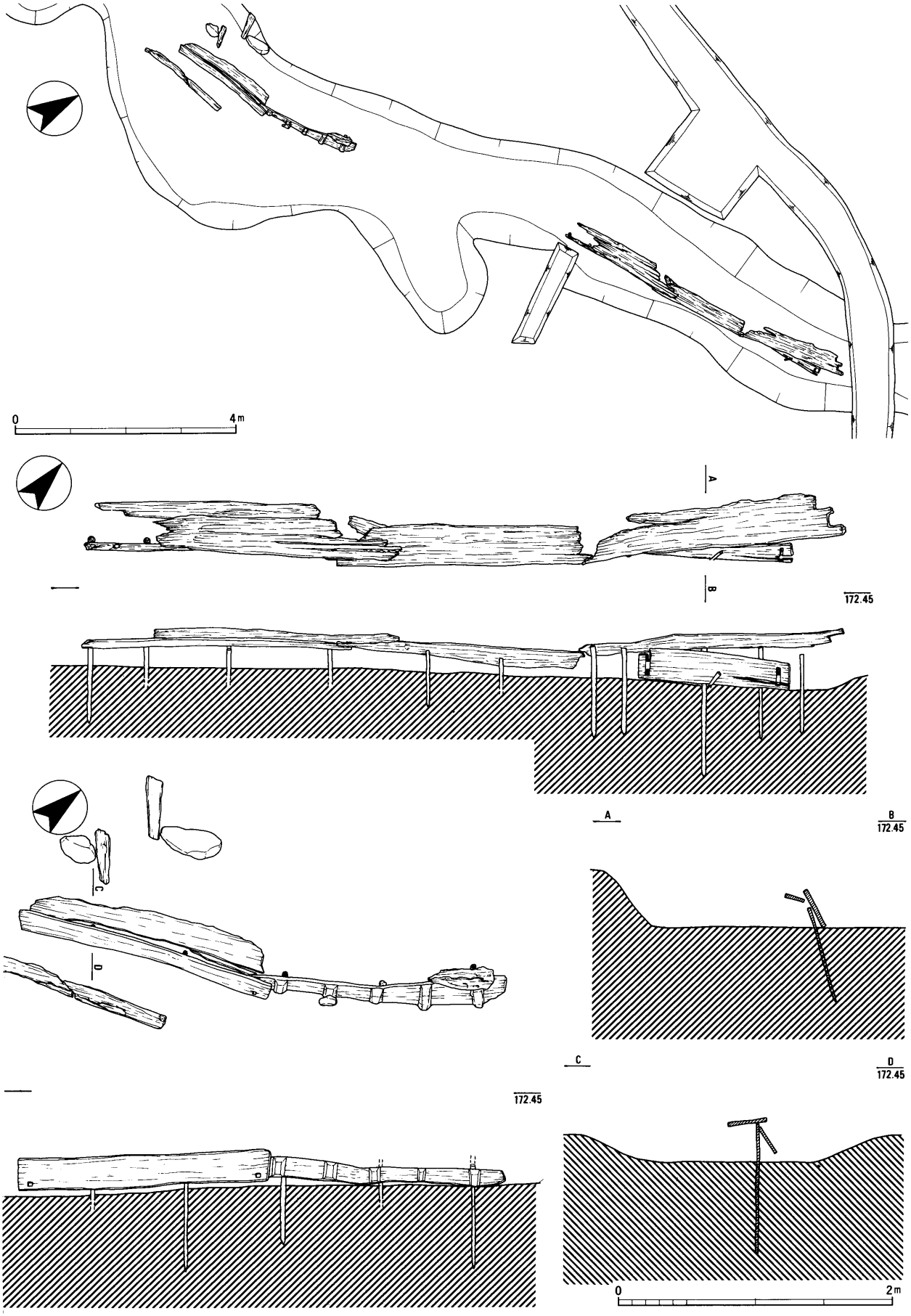
B　トレンチ調査部分

遺構確認のため、丘陵斜面部分に長さ19m、幅１ｍのトレンチ１本を設定した。

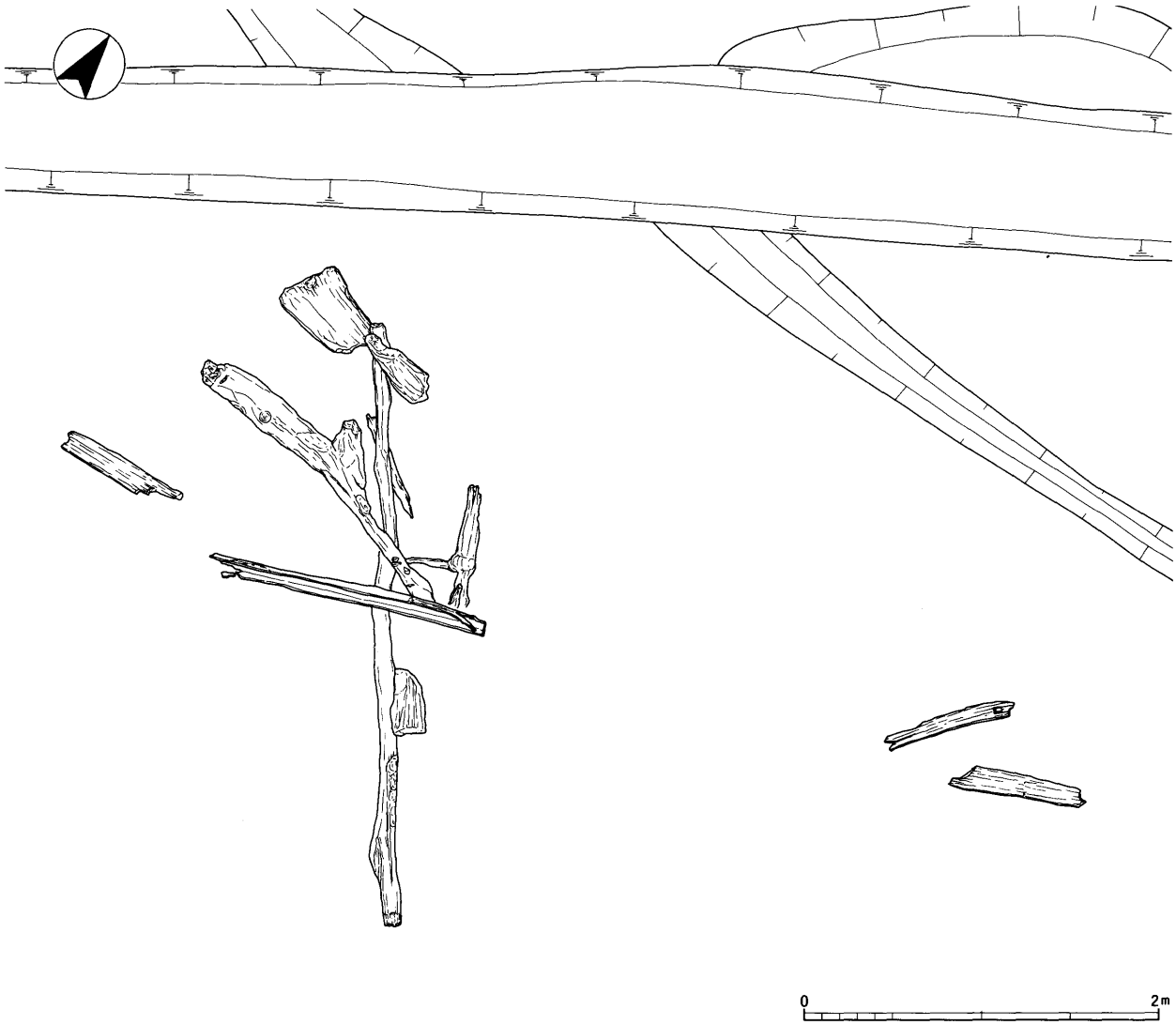
基本的な層序は、腐植土、淡黄灰色土、淡灰褐色土の順で淡灰黄色の基盤層となる。遺構、遺物ともに認められなかった。今回の工事箇所については、自然地形もしくは比較的新しい時代の開墾によって地形改変が行われたものと考えられる。



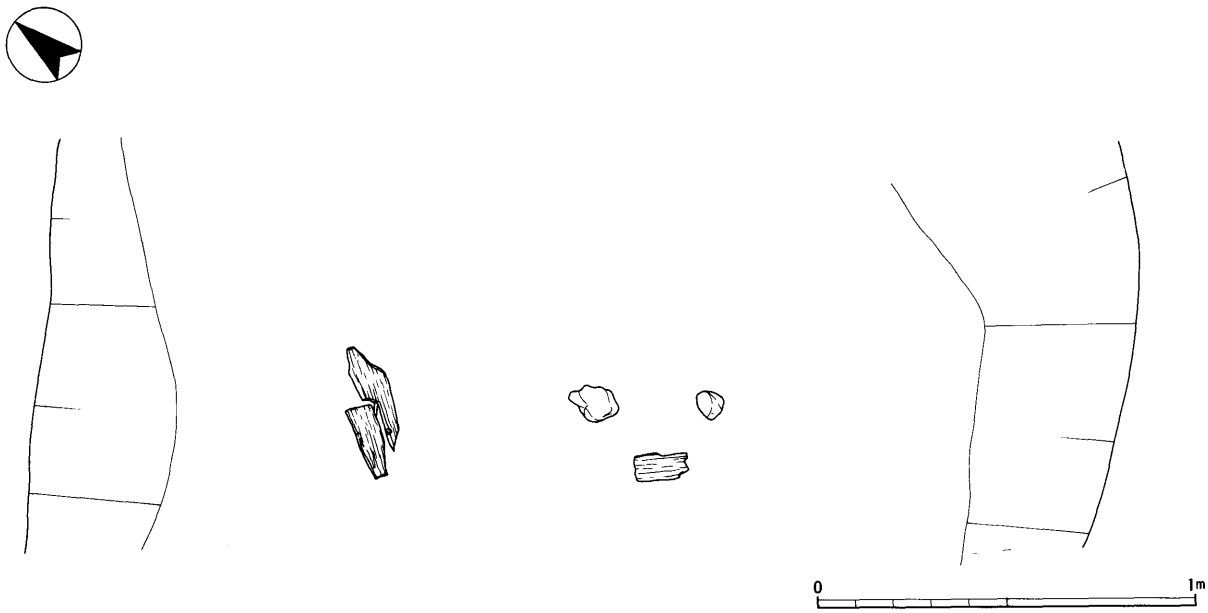
第４図　調査区平面図（１：300）　網かけは導水施設、■印は杭



第５図　ＳＤ３　導水施設位置図（１：100）および出土状況図（１：40）



第６図　ＳＺ２　木製品出土状況図（１：40）



第７図　ＳＤ３　木製品出土状況（１：20）

Ⅳ. 遺　物

出土した遺物は、コンテナバット18箱であった。その大部分が包含層出土遺物であり、古墳時代から江戸時代に至る幅広い時期の土器である。しかし、遺構出土遺物のうち、ＳＺ２やＳＤ３からは導水施設に関係する古墳時代の木製品が出土しており、貴重な資料を提供している。

Ａ　遺構出土遺物

ａ　ＳＺ２出土遺物

須恵器　杯蓋（21）　天井部は丸く、口縁端部は内傾する明瞭な段を有する。

須恵器　杯身（23）　たちあがりは高くやや内傾し、端部は内傾する段を有する。底部内面には同心円状当て具痕が残っている。また、底部外面には「×」のヘラ記号が認められる。

須恵器　有蓋高杯（22）　たちあがりは高くほぼ垂直で、端部は内傾する段を有する。脚部は、杯部底部にわずかに残存しているのみである。この部分に透孔の一部が観察でき、三方に長方形の透孔があったと考えられる。また、杯部外面下半にはヘラ記号が認められる。

土師器　小形鉢（24）　半球形状で、明瞭な頸部はなく、口縁端部は内傾する面を持つ。

土師器　小形甕（25）　口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。

木樋（1）　幅0.1m、長さ1.6mで、丸太を半裁した後、中央部分を四角く刳り貫いている。外面には防腐の為に焼いたと思われる部分が認められる。

陶器　卸皿（26）　糸切り痕未調整の平底である。14世紀ころの瀬戸産のものと思われる。後世の攪乱による流れ込みと考えられる。

一木梯子（2）　ＳＺ２の北端付近に設定されていた試掘坑№1から出土した。形状は後述する16と同一であるが、やや大型で一方の端部を欠いている。足掛部は３段を残す。１段欠けた痕跡が観察でき、足掛部は少なくとも４段あったと考えられる。１段の長さは31㎝である。

板材（３～６）　3・4は、ともに一端部に切り欠きもしくはホゾ孔が認められる。5・6は、ともに両端部を欠く板である。5は、両側面が割れていることが観察でき、もう少し幅広の板であったと思われる。

ｂ　ＳＤ３出土遺物

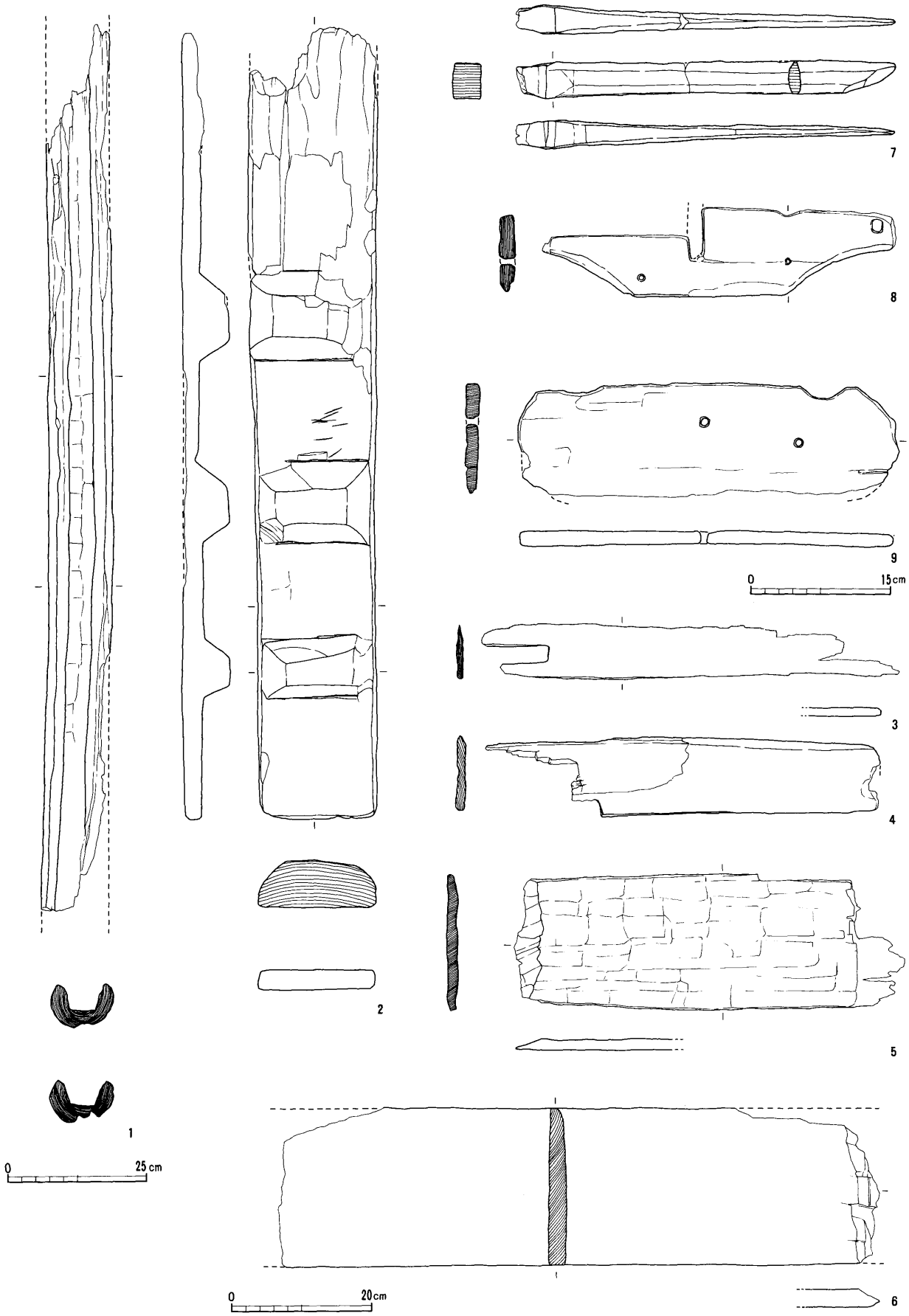
土師器　甕（27）　ゆるやかな胴部にやや外傾する口縁部がつく。内外面に細かなハケメを施す。

一木梯子（16）　表面に足掛けを作り出し、裏面を平坦に仕上げている。足掛部は５段で、上下ともに斜めに切り込み、断面形は台形である。１段の長さは37㎝である。足掛部の下端は平坦部との境界が明瞭である。ほぼ完形で、導水施設の側板に用いられていた。

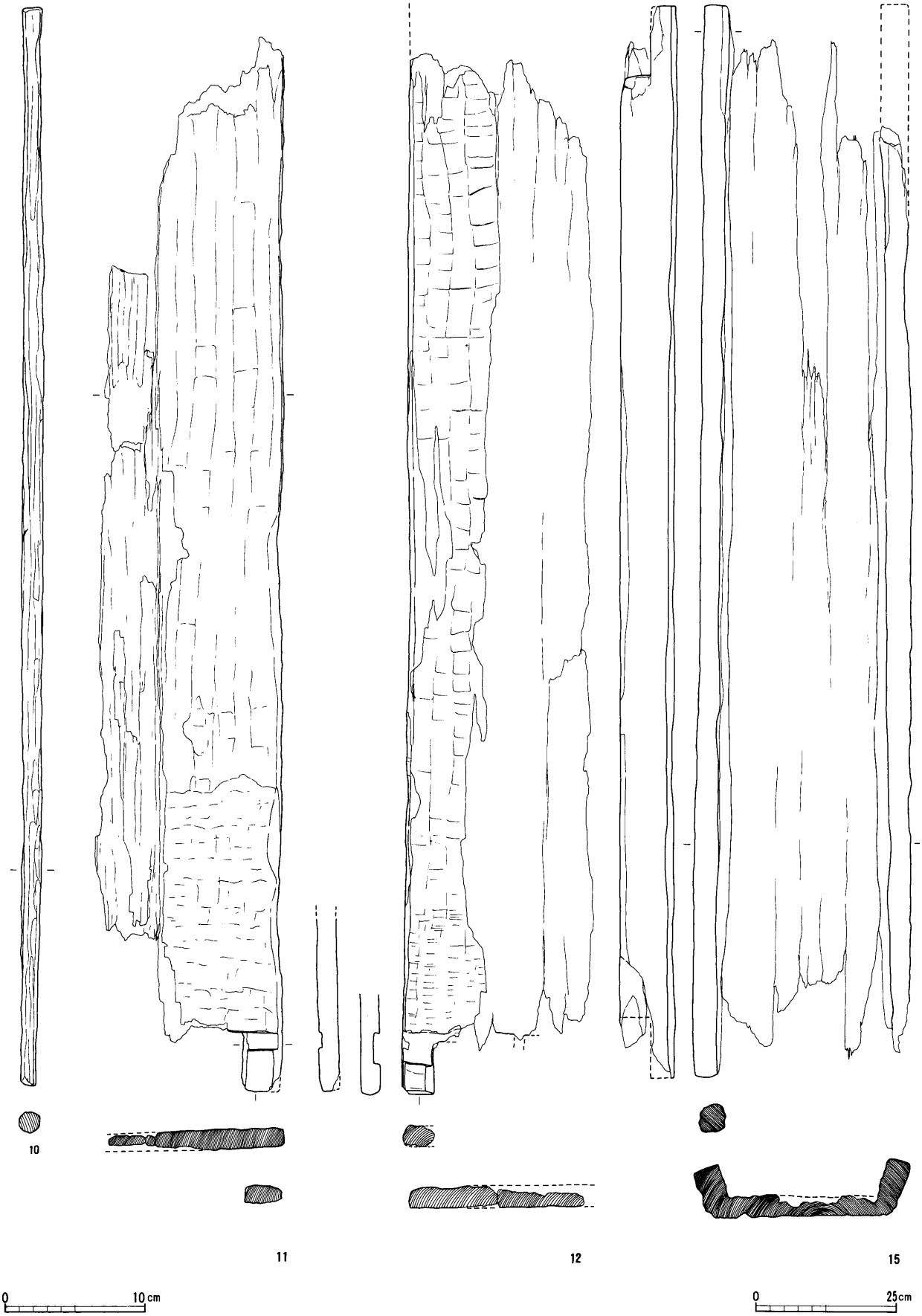
板材（11～15・17）　導水施設に用いられていた木製品である。11～13・17は、天板部分に用いられていた板材で、11・12は材質や加工痕などからもと１枚板であった可能性が考えられる。ともに、表面に焼けた痕が認められる。15は唯一両側に側板相当部分が認められるもので、断面形は凹状である。遺構検出時は凹状で設置されていた。側板相当部分の両端はホゾ状に加工されている。転用材と思われるが、何からの転用であるかは不詳である。14・17は、側板に用いられていた板材である。17は両端に方孔が２カ所ずつ認められる。裏面の方孔部分については、一段彫り込まれてから開けられており、井戸枠からの転用と思われる。14は、両端に方孔が１カ所ずつ開けられている。転用材であることは明らかであるが、何からの転用であるかは不詳である。ただ、形状から床材もしくは壁材からの転用かと思われる。

田下駄（9）　２カ所の鼻緒孔が認められる。前後に枠取付用と思われる切欠きがある。枠型の足板部分と考えられる。

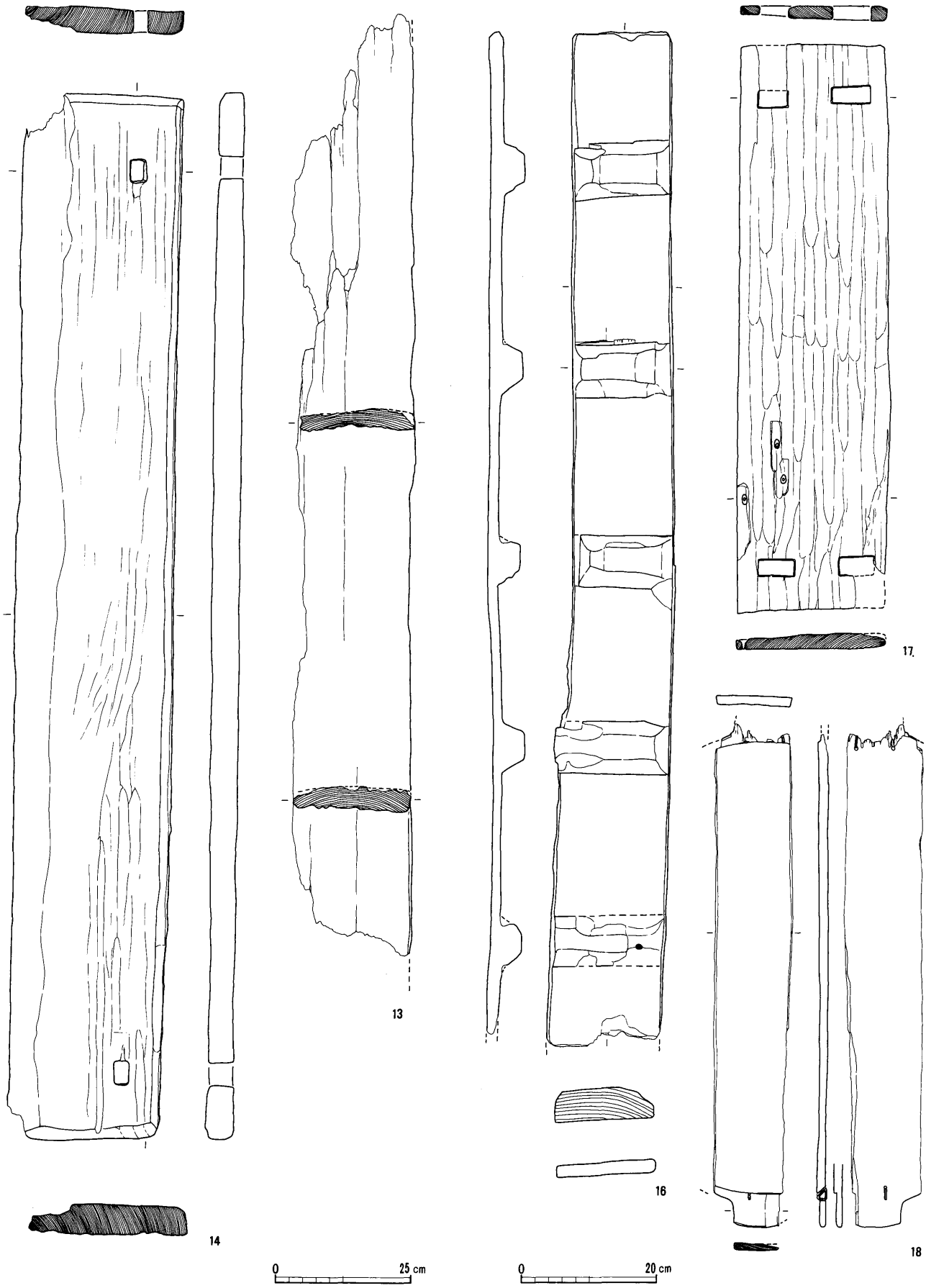
刀形木製品（7）　鞘に入れていない抜身の状態である。片刃の刃身を持ち、切先が反り上がって終わる。縞の表現も明瞭である。刀身部から柄部に向かって太くなる。鍔の表現はない。



第８図　出土木製品実測図（１）（１～４は１：10、５・６は１：８、７～９は１：６）



第９図　出土木製品実測図（２）（10は１：４、11・12・15は１：10）



第10図　出土木製品実測図（3）（13・14・16は1：10、17・18は1：8）

棒状木製品（10）　用途不明の木製品である。一方の端部が、扁平に削られている。全体に削りなどによって丁寧に仕上げられている。不規則に1㎜以下の微少な孔が開けられているが、貫通はしていない。

器台（8）　台形の板状木製品である。方形の孔と長方形の切り欠きが各1カ所、小孔が2カ所認められる。同じ形状の2枚の板を十字形に組み合わせて器物をのせる台として用いられたと考えられる。

c　ＳＫ５出土遺物

大型楕円形曲物底板（18）　樺皮結合曲物で、円板内面の周縁を一段低くつくり、ここに側板をたてて、樺皮紐と木釘で結合したものである。3ヵ所に樺皮結合の痕跡をとどめる。うち1ヵ所は木釘のみが、あとの2ヵ所には樺皮紐と木釘が残る。また、側板の外側に張り出す突起部が認められる。

B　包含層出土遺物

須恵器　杯蓋（28）　口縁端部は内傾する明瞭な段を有する。

須恵器　杯身（29・30）　たちあがりは高くやや内傾し、端部は内傾する段を有する。

土師器　二重口縁壺（33）　一段目の口縁部は、斜め上方に緩やかに外反する。二重口縁部は外反した後、上方に引き出される。

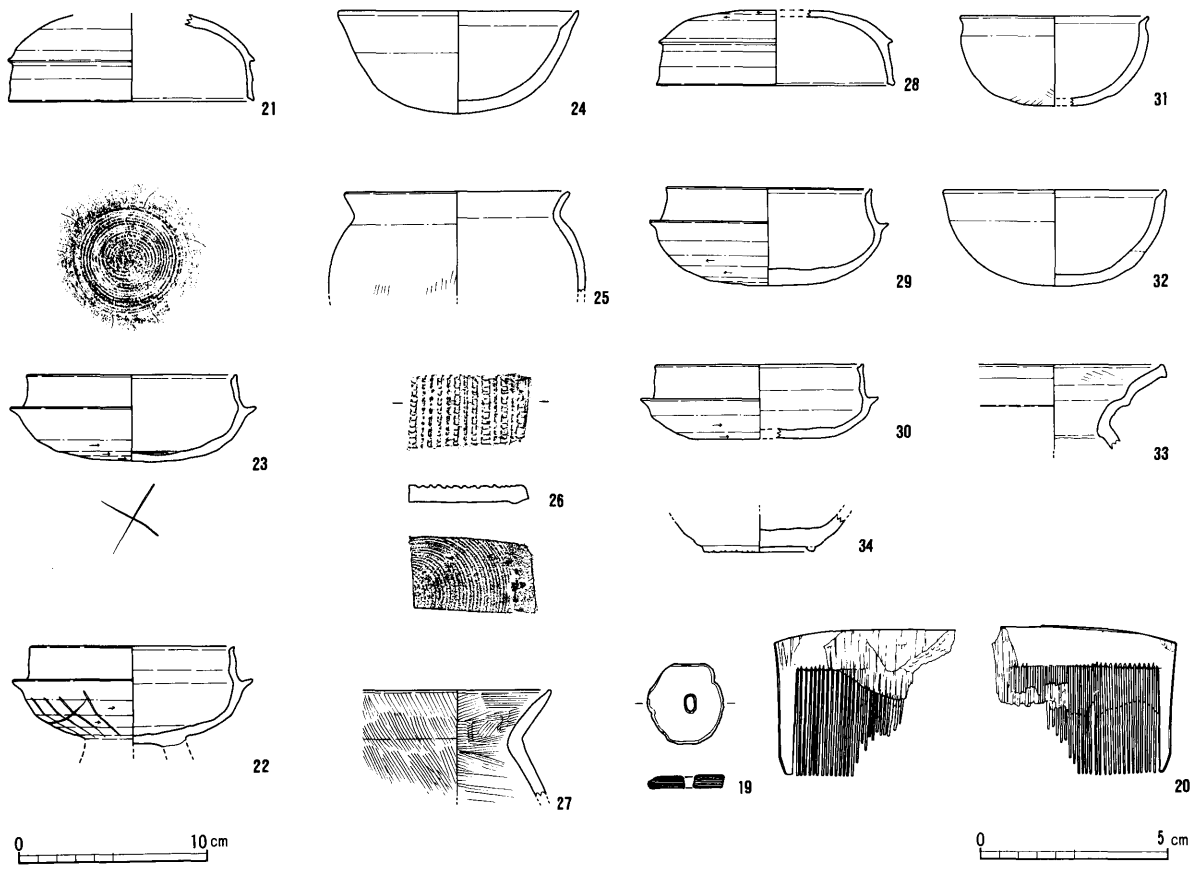
土師器　鉢（31）　半球形の体部に外反気味に立ち上がる短い口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。

土師器　小形鉢（32）　半球形状で、明瞭な頸部はなく、口縁端部は内傾する面を持つ。

山茶椀（34）　低い貼付高台で、高台端部には籾殻痕が明瞭に残る。藤澤編年[14]の第6型式に相当し、13世紀頃のものと思われる。後世の流れ込みである。

横櫛（20）　肩部に丸味を持つAⅡ形式[15]に属するものと考えられる。歯は細く、1㎝あたり9本である。

紡錘車（19）　木製で円形の薄い板材を用いる。中央に径1㎝の円孔がある。上面と下面の区別はできない。



第11図　出土遺物実測図（19・21～34は1：4、20は1：2）

V. 結　　語

水衛遺跡の試掘調査では、古墳時代から中世にかけての遺物とともに、一木梯子が出土したことから、当該時期の集落跡が存在すると考えられた。ところが、今回の調査では、樋管に転用材を用いた導水施設を検出するとともに、別の遺構からは形態の異なる木樋が出土した。このことは、柘植川沿岸地域の歴史解明のための貴重な発見であったといえる。

樋管を用いた導水施設の検出例は、全国的に見ても少数である。一方、県内では、今までに城之越遺跡で木樋もしくは水盛りと考えられる木製品が報告されている[16]のみであり、古墳時代の導水施設の検出例は報告されていない。そこで、今回検出した導水施設の構築時期、構造、目的について少しまとめてみたい。

構築時期について

包含層遺物としては、古墳時代から江戸時代まで幅広い時期の遺物が出土している。これは、断続的であるかあるいは連続的であるかは別にしても人々の日常生活が古墳時代以降にこの地域で営まれていたことを示すものである。

今回の調査で検出した遺構から出土した土器についても古墳時代以降に属するものであり、この施設が古墳時代以降に構築されたことは間違いないであろう。ただ、遺構出土の土器は数が少ないことから、今回検出した導水施設について共伴する土器からの時期決定は難しい。そこで、この施設の時期決定に重要な位置を占めるのが、樋管に用いられていた木製品である。

木製品の年輪年代法による測定結果[17]から6世紀代には、すでに伐採・加工されていたことが判明している。そして、用いられていた木製品は、一木梯子、井戸枠など他からの転用であることが明らかな製品が多い。木製品の耐用年数を考慮にいれなければならないが、伐採され、加工されてから百年以上経過したのちに他の施設に転用することも考えにくい。これらの点を考慮し、年輪年代法から求められた年代および共伴する土器の年代からこの施設の構築年代を古墳時代後期、6世紀頃に構築されたと推定するのが妥当であろう。

構造について

導水管として用いられる樋管には、丸太材を刳り貫いたものと箱型のものの2種類がある。今回の調査では、ＳＺ２からは前者の、ＳＤ３からは後者に類似した樋管が出土している。ＳＺ２出土の木樋については、原位置を保持していないのでその施設の構造については論ずることはできない。しかし、ＳＤ３については原位置を保持した状態で検出している。そして、この施設が特殊な構造をしていることに注目したい。

箱型の樋管を敷設する場合、4枚の板を組み合わせ、箱状にするのが最も妥当な方法であると考えられる。しかし、今回検出した導水施設は、天板と一方の側板だけで構成され、もう一方の側板はなく、底板相当部分はＳＤ３の底と共有している。構築当初からこのような構造であったのか、導水管として機能していたのかなどの疑問が残る。

では、側板のない部分については、どのように考えるべきか。現時点で想定できる状況は、構築当初は側板とそれを支持する杭が存在したが、その後腐植が著しく進み無くなってしまった、あるいは当初から側板は無く、溝を掘った後に一方の側壁のみ土で埋め直し整形した後、側壁としていたという2つのケースが考えられる。

調査においては、側板や杭列は痕跡も含めて検出されなかった。導水施設部分の土層断面の観察からは、天板の北側端部付近まで埋めていることが観察できる。この状況から北側部分は当初から側板や杭列は無く、土を盛り直し整形することによって側壁としたものと思われる。ただ、このような構造で流水に対して耐えられるだけの強度があったのかという疑問は残る。一方、底板相当部分については、この面において水が涌いてくることから透水層もしくはその直上部分に相当すると考えられ、あえて底板をもうける必要性がなかったのではないかと推測さ

れる。

構築の目的について

樋管を敷設する目的として考えられるのは、灌漑用設備として構築する、もしくは祭祀的な意味合いを含む権力の象徴としての施設として構築するの2点である。

過去の調査から当遺跡付近の柘植川沿岸部では前述したように古墳時代の集落跡が3遺跡確認されているが、今回の調査区からは、住居跡や水田跡など人々の日常生活を窺い知る遺構は検出されなかった。

また、この地域が古くから開発されているとはいえ、今回の調査区は丘陵の端部付近にあたることから、この場所に水田が営まれ、灌漑設備としての導水管を敷設していた可能性は低いものと考えられる。

そこで注目したいのが、当遺跡の南側に位置する天長山古墳群の存在である。具体的な指摘はできないが、この古墳群の存在は、5世紀末から6世紀にかけて小規模ながらも古墳を築造できるだけの勢力をもった豪族がこの付近に存在したことを窺わせる。

今回の調査では、豪族居館を想定させる遺構は検出されなかった。しかし、灌漑設備ではないと仮定すれば、この施設はこの地域に存在した有力な勢力が何らかの理由で構築したものと推測される。ただし、天長山古墳群の所在する丘陵端部、現在の県立伊賀高等学校の敷地は、湧水が著しい軟弱地盤であり、居住には適さない場所であることに注意しなければならない。これらのことを考慮すると、推測の域を出ないが、このような大掛かりな施設を構築していること、刀形木製品が出土していることから、調査区の周辺に豪族居館が存在し、居館での日常生活に必要な水を引くため、あるいは祭祀に用いる浄水を得るためにつくられた施設や権力の象徴としての施設と想定したい。

いずれにしても、検出された遺構、出土した遺物が限られており、これらから水衛遺跡の全体像を窺い知ることはできない。周辺地域の調査や他の類例調査などを行った上で詳細な検討を行いたい。

註

① 『伊賀町史』 伊賀町 1979
② 平子弘ほか『阿山郡伊賀町 天道遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1989
③ 『三重県埋蔵文化財年報19』 三重県教育委員会 1989
④ 仁保晋作「阿山町東山古墳の遺構と遺物」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992
⑤ 森浩一・石部正志 「古墳文化の地域的特色5 畿内およびその周辺」『日本の考古学』 中央公論社 1966
⑥ 吉水康夫「権現山古墳の出土の遺物」『筒御前古墳発掘調査報告』 伊賀町教育委員会 1977
⑦ 『三重県埋蔵文化財年報18』 三重県教育委員会 1988
⑧ 註②に同じ
⑨ 鈴木克彦 「阿山郡伊賀町 畔垣内遺跡（A地点）」『平成2年度農業基盤整備事業 埋蔵文化財発掘調査報告 －第1分冊－』 三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991
⑩ 註⑦に同じ
⑪ 註⑨に同じ
⑫ 註①に同じ
⑬『日本書紀』下 日本古典文学大系68 岩波書店 1965
⑭ 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986
⑮『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料 第27冊 奈良国立文化財研究所 1985
⑯ 穂積裕昌ほか『城之越遺跡』 三重県埋蔵文化財センター 1992
⑰ 光谷拓実氏による年輪年代測定から遺物図版番号6の板は319年に、同14の板は474年を遡らないという結果が得られた。光谷氏によれば、2つの試料は測定できる限界に近い年輪数であったこと、14の測定値が5世紀後半にあたるが、誤差を考慮して6世紀代と考えるのが妥当であるとのことであった。

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
21	011-02	杯蓋	H S Z 6 2	12.8	—	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	灰色		
22	007-01	有蓋高杯	H S Z 5 2	10.8	—	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密 2㎜の石を含む	並	黄灰色		三方透かし 杯部外面にヘラ記号
23	007-04	杯身	F S Z 4 2	11.2	4.7	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密	並	褐灰色	1／4	底部外面に「×」のヘラ記号
24	007-05	小形鉢	I S Z 6 2	14.8	5.5	—	ナデ・横ナデ	やや密 ～2㎜の石を含む	並	灰白色	わずか	
25	011-05	小形甕	F S Z 5 2	11.8	—	—	ナデ・横ナデ	やや粗	並	灰黄褐色		
26	012-03	卸皿	H S Z 2 2	—	—	—	内：卸目 外：糸切り痕	密	良	灰白色		
27	012-01	甕	L S D 6 3	—	—	—	ハケメ	やや粗 細砂粒を含む	並	黒色	小片	ハケメは6本／1cm
28	011-01	杯蓋	F 包含層 4	12.5	4.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	灰色		
29	007-03	杯身	J 包含層 10	10.9	5.3	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	やや密 ～4㎜の石を含む	並	灰色	3／8	
30	011-03	杯身	F 包含層 7	11.0	4.0	—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	やや粗 1㎜～の 小石・砂粒を含む	良	灰色		
31	011-04	鉢	F 包含層 4	10.0	4.8	—	ナデ・横ナデ	やや粗 1.5㎜～ の小石を含む	並	にぶい 黄橙色		底部外面にハケメ？
32	007-02	小形鉢	J 包含層 10	11.9	5.2	—	ナデ・横ナデ	やや密 ～4㎜の石を含む	並	明灰白色	2／3	
33	012-02	二重口縁壺	F 包含層 7	—	—	—	ナデ・横ナデ	やや粗 1㎜～の 小石・砂粒を含む	並	にぶい 黄橙色	小片	
34	011-06	山茶椀	J 包含層 8	—	—	底径 5.8	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	やや密 2㎜～の 小石・砂粒を含む	並	灰白色		高台底面に籾殻痕

第1表　出土遺物観察表

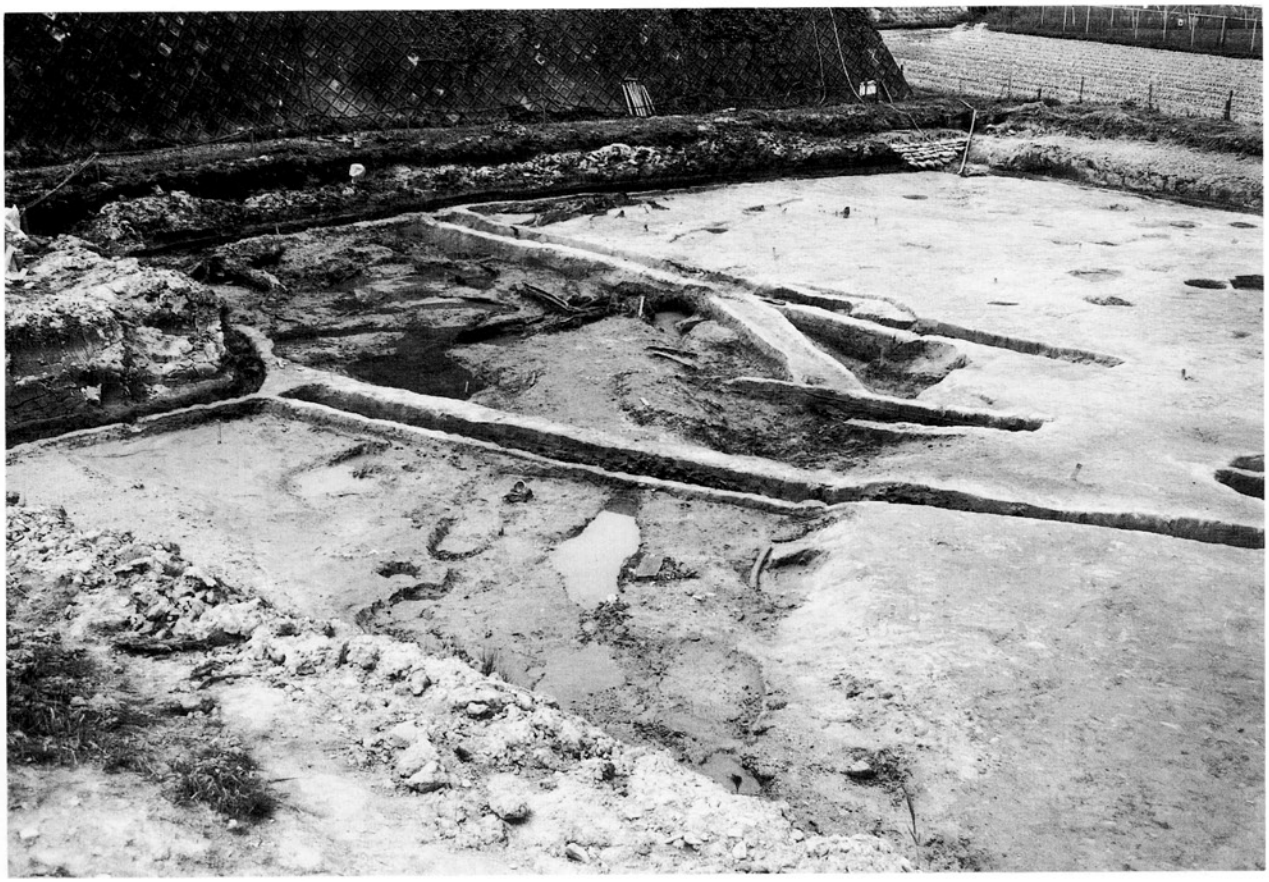
No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	樹種	木取り技法	特徴	備考
1	003-02	木樋	F S Z 3 2	現存 160	11.5	8.4	スギ	芯材		
2	008-01	一木梯子	試掘坑 No. 1	現存 142.8	21.0～22.8	平坦部 3.5 足掛部 8.5	ヒノキ	板目		3段残存 段間 31cm
3	009-02	板	F S Z 4 2	現存 75.2	現存 9.5	1.2	ヒノキ	板目		切り欠きもしくはホゾ孔あり
4	009-03	板	E S Z 3 2	現存 71.0	13.1	1.7	ヒノキ	追柾目		切り欠きもしくはホゾ孔あり
5	004-02	板	G S Z 5 2	現存 56.2	19.7	1.55	ヒノキ	追柾目	手斧痕	
6	005-02	板	K S Z 6 2	現存 86.0	22.0	2.0～2.5	ヒノキ	追柾目		
7	006-2-01	刀形木製品	L S D 6 3	現存 41.0	3.8	3.1	コナラ属アカガシ亜属	柾目		
8	006-1-03	器台	S D No. 3 9	現存 37.9	現存 9.7	1.7	ヒノキ	板目		
9	006-1-02	田下駄	S D No. 3 12	41.0	12.2	1.6	ヒノキ	柾目		
10	006-1-01	棒状木製品	L S D 8 3	77.4	1.5	1.5	ヒノキ	辺材		
11	004-01	板	S D No. 3 1	現存 189.0	現存 23.0	3.8	ヒノキ属	柾目	手斧痕	天板相当部分
12	001-01	板	S D No. 3 2	現存 186.7	現存 34.0	3.5～4.0	ヒノキ	追柾目	焼け痕あり	天板相当部分
13	003-01	板	S D No. 3 5	現存 174.9	現存 23.0	4.5	ヒノキ	板目		天板相当部分
14	002-01	板	S D No. 3 6	194.0	26.5～28.9	4.5～5.0	ヒノキ	追柾目	表：鉞仕上げ 裏：手斧痕（4.5～5.0cm）	側板相当部分 床材または壁材からの転用か
15	010-01	板	S D No. 3 3	191.7	34.5～38.0	4.0～4.2	ヒノキ	追柾目		天板相当部分 断面凹形
16	008-02	一木梯子	S D 3	現存 187.2	18.0～20.8	平坦部 2.2 足掛部 5.8	ヒノキ	追柾目		側板相当部分 5段残存　段間 37cm
17	005-01	板	S D No. 3 8	105.0	27.0	2.0～3.0	ヒノキ	追柾目	鉞痕	側板相当部分 井戸枠からの転用か
18	009-01	大型楕円形曲物	S K 5	推定復元 76.3	11.2	0.9～1.2	ヒノキ	追柾目		底板部分
19	006-2-02	紡錘車	C 包含層 2	—	—	0.7	ヒノキ	板目		直径4cm
20	013-01	櫛	M 包含層 10	10.7	3.9	0.7	ツゲ			

第2表　出土木製品観察表

図版１　調査前風景（北から）

図版２　調査前風景（南から）

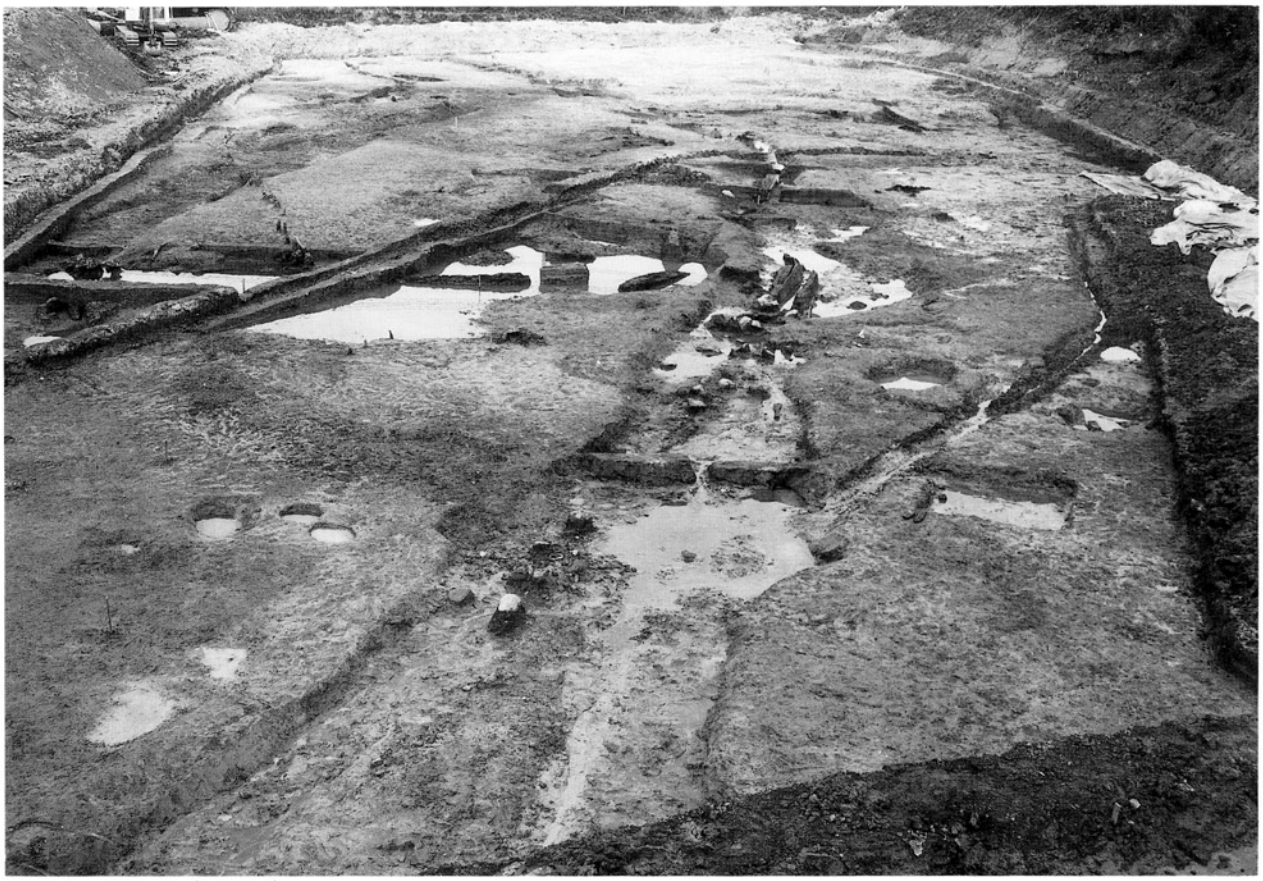
図版３　調査区北側全景（南から）



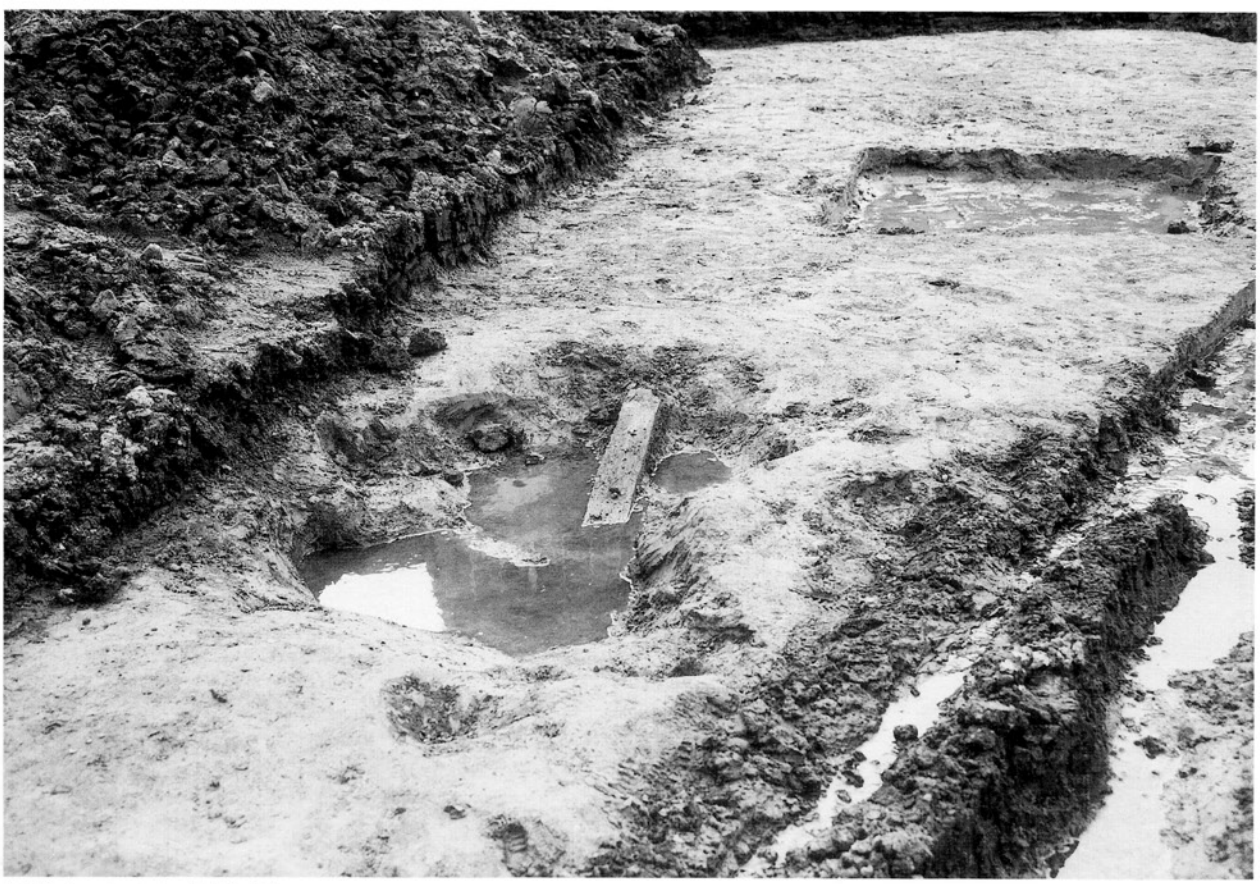
図版４　ＳＺ２（南から）

図版５　ＳＺ２・木樋出土状況（東から）

図版６　調査区南側全景（西から）



図版７　ＳＤ３（西から）



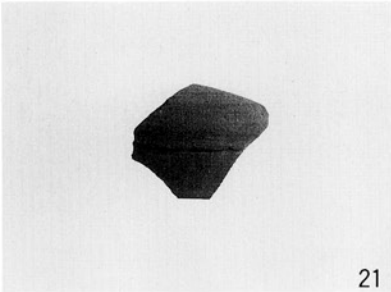
図版８　ＳＫ５（東から）

図版 9　櫛出土状況

図版 10　作業風景（西から）

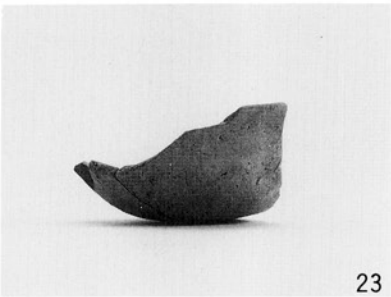
図版 11　ＳＤ３・導水施設出土状況（東から）

図版 12　ＳＤ３・導水施設出土状況（東から）

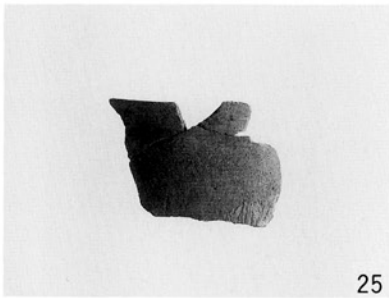

21

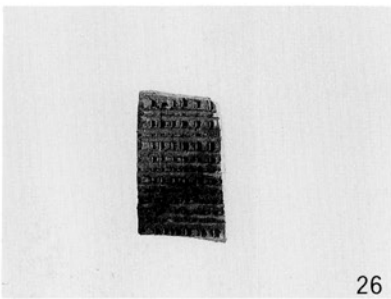
22

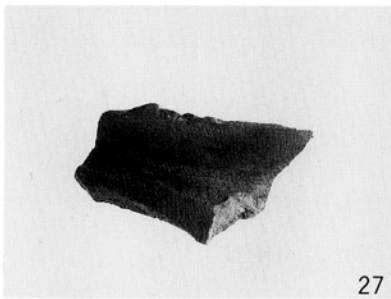
22


23

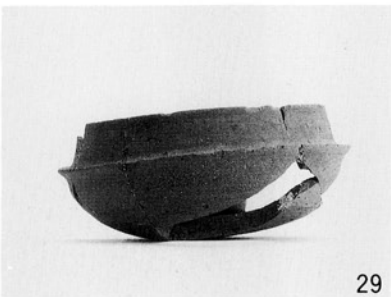
24

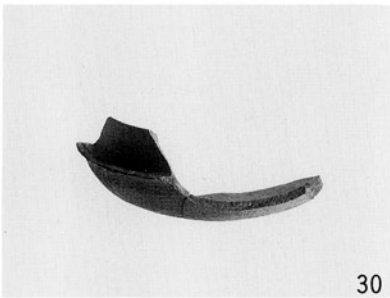

25

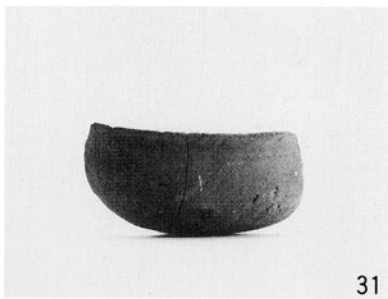

26

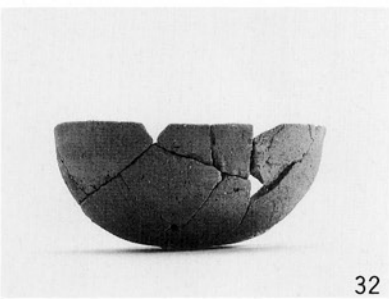

27

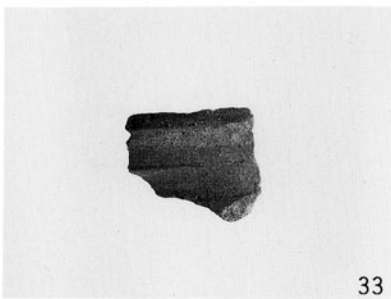
28

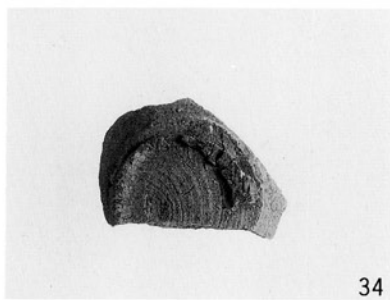

29

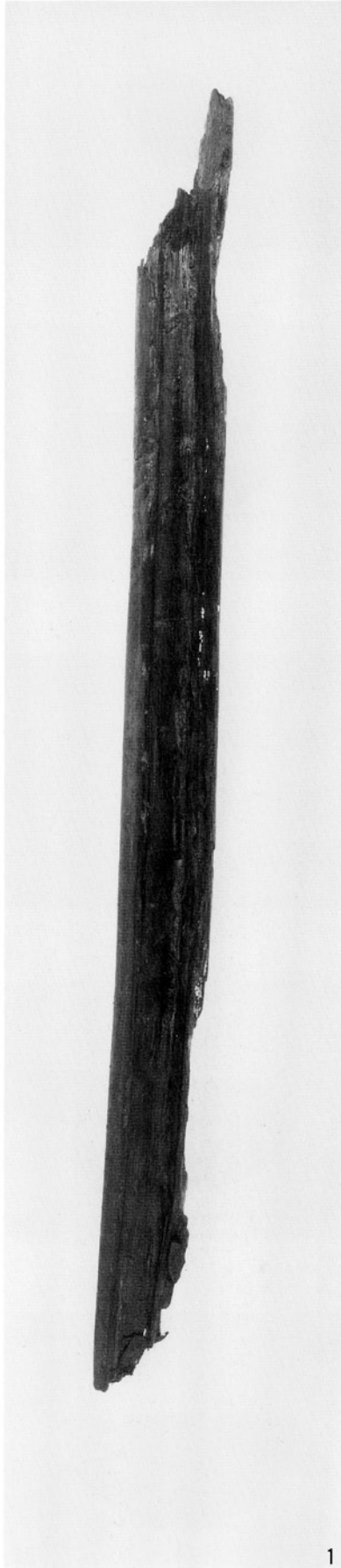

30


31

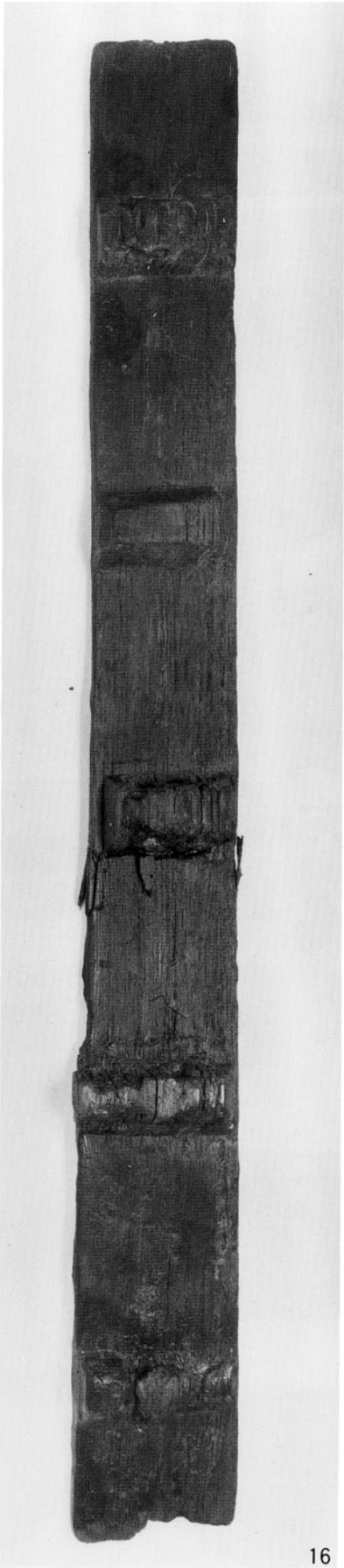

32


33

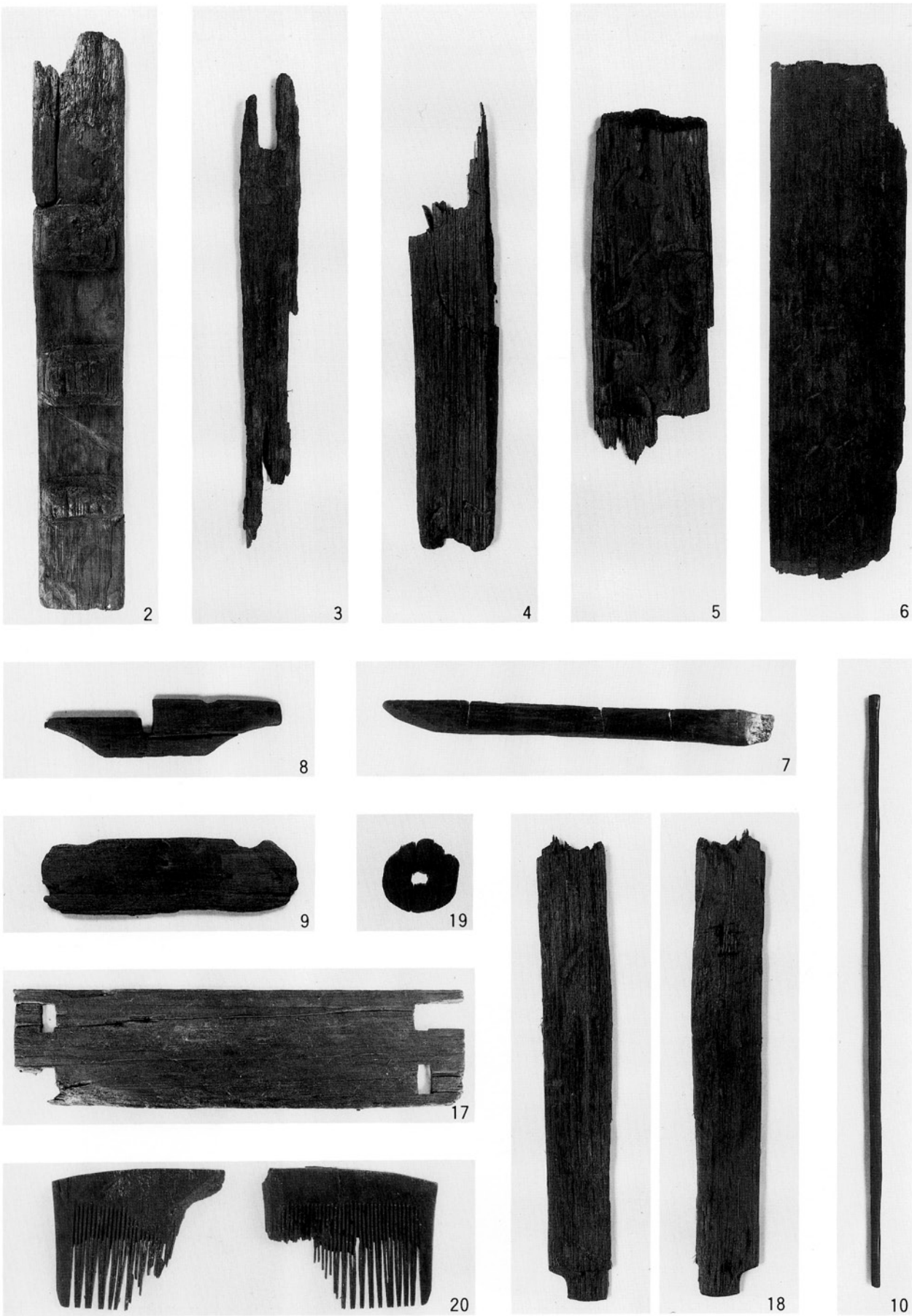

34



図版 14　導水施設出土木製品



図版 15　導水施設出土木製品



図版16　出土木製品

報告書抄録

ふりがな	みずえいせきはっくつちょうさほうこく
書名	水衛遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	148
編著者名	船越重伸
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515-03　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL 05965(2)1732
発行年月日	西暦　１９９７年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みずえいせき 水衛遺跡	三重県阿山郡 いかちょう かわひがし 伊賀町川東 あざ みずえ 字水衛	24206	207	34° 48′ 29″	136° 12′ 30″	19960715～ 19961227	2,200	県立伊賀高等学校体育館用地造成工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水衛遺跡	その他	古墳	導水施設 溝　3条 池状土坑　1基 土坑　1基 小穴	土師器 須恵器 瓦器 陶磁器 銅銭 木製品 木樋 一木梯子 板材	転用した木製品を組み合わせた導水施設を検出した

平成9(1997) 年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007) 年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１４８

水衛遺跡発掘調査報告

１９９７（平成９）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷者　東海印刷株式会社